

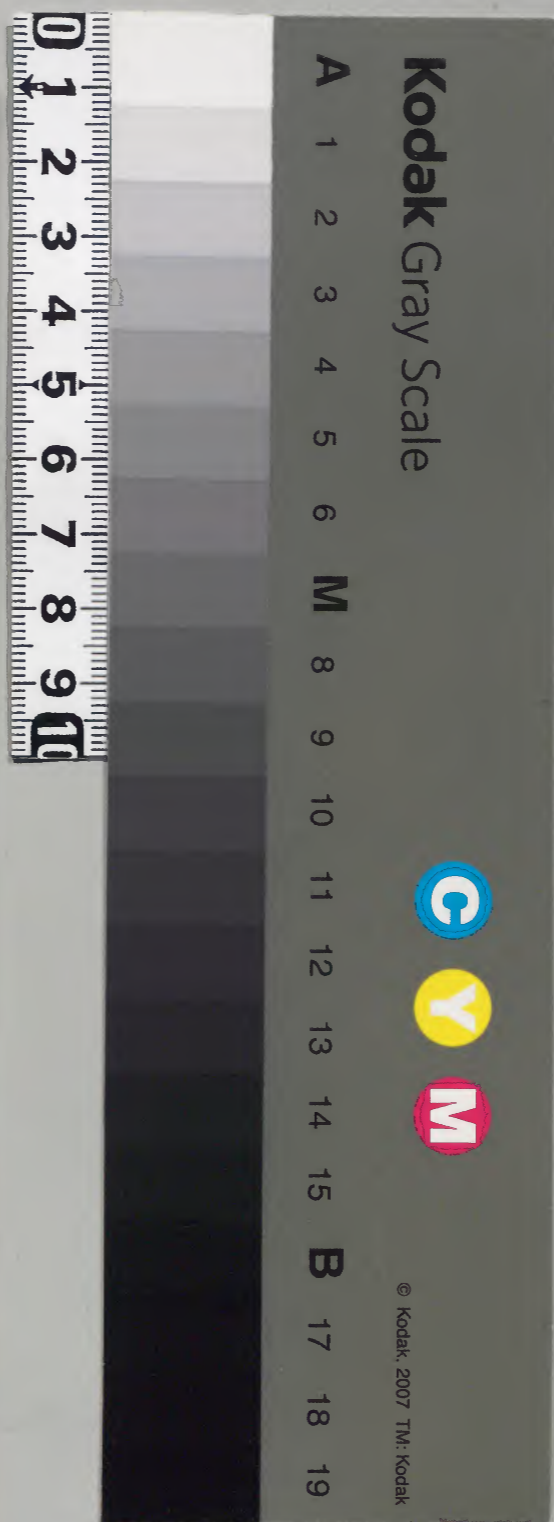
觀迹聞老志

十二

和書門	
二九二一	類
百四二	號
一七	函
冊	架

內閣文庫	
和書	二九二一
類	百四二
號	一七
冊	函
架	冊

內閣文庫	
番號	和 29111
冊數	17 (10)
函號	174 265



教部省
文庫與

圖書
入庫

觀跡
潤老

行方
郡

丙一〇二六八號

志卷之十二

順和名有子鶴地

弘前監官
藏書記

羽 觀跡 潤老 志卷之十二 順和名有子鶴地 弘前監官藏書記

十 一行 方郡 德帝 神護景雲三年三月辛巳行方

四 郡人外正六位下大伴部三田等四人賜姓大伴

行方連是太國造道嶋宿禰島足之所請也

同年四月甲辰陸奧國行方郡人外正七位下下

毛野公田主等四人賜姓朝臣

四十九代光仁帝寶龜五年七月丁巳陸奧行方

郡災燒穀籟二万五千四百餘斛

神名帳曰行方郡八座大一座高座神社

日奈神社 冠嶺神社 御力神社 鹿嶋御子

神社 益多嶺神社 多珂神社 大谷神社 押雄神社

按行方郡不詳其地或說以小鶴池為行方名跡和漢三才圖繪亦載于此郡中然則此地乃古之行方郡而今廢位之宮城郡者歟

十二階上郡

五十代桓武帝延曆四年四月辛未中納言從三位兼春宮大夫陸奥按察使鎮守將軍大伴宿禰家持等言名取以南一十四郡僻在山海去塞懸遠屬有徵發不_レ會_レ機急由是權置多賀階上二郡募集百姓足_レ人兵於國府後防禦於東西誠是備

預不虞摧鋒萬里者也但以徒有閑說之名未仕統領之人百姓顧望無所係心望請建為真郡備置官負然則民知統攝之歸賊絕窺窬之望許之按階上郡不詳其地於本吉郡有_レ稱波止上者是古之階上地而誤其文字者也

又曰家持謀不虞之變而請建真郡且置統領之人最得計策之旨依此說則多賀亦聊屬郡縣者也

十三色麻郡

五十代桓武帝延曆八年八月己亥色麻等一十_レ郡與賊接居不可同等故延復_レ年

五十四代仁明帝嘉祥元年五月辛未色麻郡少領外正七位上勳八等同姓千繼等八烟賜姓阿陪陸奧臣

神名帳曰色麻郡一座大伊達神社名神

按色麻郡不詳其地加美郡有稱四竈者是古之色麻地而誤其文字者也

十四新田郡

四十八代祿德帝神護景雲三年三月辛巳陸奧國新田郡人外大初位上吉祿侯部豐庭賜姓上遠野中村公大國造道嶋足請也
五十代桓武帝延曆八年八月己亥勅陸奧國入

軍等今年田租宜皆免之兼給復二年新田等十

ヶ郡与賊接居不可同等故延復年

同十八年二月乙未流陸奧國新田郡百姓弓削部虎麻呂妻大部小廣刀自女等於日向國久住賊地能習夷語屢以謾語騷動夷懷心也

神名帳曰新田郡一座小松神社

按新田郡不詳其地賀美郡有稱新田者三區是古之新田地而分之为上中下三區者也

十五長岡郡光仁十一年紀有賊入長岡之事

五十代桓武帝延曆八年八月己亥陸奧國長岡等郡与賊接居不可同等故延復年

八十三代土御門帝兼元五年為建曆元年四月二日

議陸奧國長岡郡小林新熊野事元

按長岡郡今為村落有荒野荒西屬栗原郡所記

小林村亦在長岡村西是古之長岡地也

十六葛岡郡

八十二代後鳥羽帝文治五年九月廿日賜葛岡

郡于富山次郎重忠

按葛岡郡今為村落屬玉造郡有故館和葛岡

城往昔重忠居館而後葛西監物據之是古之

葛岡地也

十七丹取郡

四十三代元明帝和銅五年十二月辛卯新建陸

奧國丹取郡

四十五代聖武帝神龜五年四月丁丑陸奧國改

丹取軍團為玉造軍團並許之

按丹取郡不詳其地以所記考之則玉造乃古

國之丹取地也且保之其郡者余今六月

十八小田郡

陸奧山

按小田郡地乃牡鹿遠嶋是也後併之牡鹿郡

其証見于光俊陸奧山歌詞皆是古之小田地

也八

右八郡今廢共在凡廿九郡太守封疆之中十九志波郡一作子波斯波郡

五十代桓武帝延曆八年六月庚辰征東將軍奏
備子波和我僻在深奧臣等遠欲薄伐糧運有難
其從玉造塞至衣川營四日輜重受納二日然
則往還十日依衣川至子波地行程假令六日輜重
往還十四日從玉造至子波地往還廿四日程也
途中逢賊相戰及妨雨不進之日不入程內河陸
兩道輜重一萬二千四百四十人一度所運糧六
千二百十五斛征軍二萬七千四百七十人一日
所食五百四十九斛以此支度二度所運僅十石

臣等高量指子波地支度文闕割征兵加輜重則
征軍數少不足征討加以軍入以來經涉春夏征
軍輜重並是疲弊進之有危持之無利久屯賊地
運糧百里之外非良策也雖蠢爾小寇且連天誅
而水陸之田不得耕種既失農時不減何待臣等
所議莫若斛運遺糧支擬非常軍士所食日二千
斛若上奏聽裁恐更糜費故今月十日以前解各
之狀牒知諸軍臣等愚議且奏且行
八十二代後鳥羽帝文治五年九月四日賴朝自
厨川至志波郡陣岡蜂社六日河田次郎獻其土
泰衡首于陣岡賴朝令小山朝光斬河田次郎十

一日賴朝自陣岡復到厨川城志賀理和氣神社
神名帳曰斯波郡一座大正志賀理和氣神社
五十五代文德帝仁壽三年七月辛未陸奥國志
賀理和氣神加正五位大正

比爪館比爪五郎季衡居城是也乃秀衡家族比爪入道俊
衡子也天正中戸部御所在茲南部大膳太夫信
直攻之城陷東史季衡乃俊衡弟也與旧說異也
東史曰八十二代後鳥羽帝文治五年九月十五
日桓爪太郎俊衡其弟五郎季衡其子太田冠者師
衡次郎兼衡河北寇者忠衡季衡子新田冠者經

衡凡六人降于厨川太田冠者至忠衡乃俊衡
比爪桓爪相同今作日詰猶言部限矣凡到界
限者俗謂之詰責而到其極之義

游泳池田在館南比爪五郎幼時所游泳之池也
蛇蟻堆田往時有巨蛇甚害人鄉黨患之殺而埋此地今猶

在其外傍有幽泉可寫人影稱之箱泉
走湯山木其下乃季衡幼時磬控馳驅之地也今曰五郎

調馬路木

神社考曰奥州高水寺者移走湯椎現其側有示
祠曰大道祖是李衡之祖清衡所勸請也祠後有
大槻木文治五年源賴朝伐泰衡歸時蒼樹下射
二鎬箭曰獻走湯椎現云
高水寺在古館邊四十八代称德帝朝所建也
東史曰蜂社邊有寺曰高水寺往昔称德帝詔置
州置一文觀自在王菩薩像云

二十富田郡

五十代桓武帝延曆八年八月己亥富田等与賊
接居不可同等故延復年

廿一耶麻郡

一作耶磨

廿五十四代仁明帝永和七年三月庚辰陸奥國耶
磨郡大領外正位王勲等文部入鹿戸一烟賜
姓上毛野陸奥公

神名帳曰耶磨郡一座磐崎神社

高集
耶磨郡大領外正位王勲等文部入鹿戸一烟賜
姓上毛野陸奥公

廿三
秋會
秋會
秋會

廿五糟部郡
糟部如今号九戸南部領也

八十二代後鳥羽帝文治五年八月廿一日泰衡
出多賀波場城經平泉故館放火去經糟部郡之
比内郡

廿三肥内郡 一作比内

文治五年九月三日泰衡狼狽經糟部郡之肥内
郡入世臣河田次郎贄柵次郎裁逆泰衡

按贄柵乃今二戸地贄訓耳惠二戸方語相近
此地古之比内郡也

廿四和我郡

五十二代嵯峨帝弘仁二年正月丙申於陸奥國
置和我禪縫斯波三郡

廿五禪縫郡 一作禪縫貫

見予前條

廿六磐手郡

厨川城

在南部盛岡以西來神河畔阿倍賴時子貞任居
城也仍曰之厨川次郎貞任

七十一代後冷泉帝永承五年庚寅賴時反王命而

起乱源賴義朝臣奉勅東征賴時乃降

六年貞任再違命據衣河館

七年攻衣河城自是攻守有歲

天喜五年丁酉賴時戰死貞任守河崎城

忠保按此時有牙
甚可疑恐記者誤
俟後考
解屍出忠保口貞

康平五年壬寅九月五日貞任出厨川城將八千
兵擊于小松柵義家義綱奮戰大敗貞任軍貞任
退磐井川武則以奇計復擊之貞任走衣河
同六日貞任敗走入鳥海柵遂逃入厨
川柵鳥海柵乃在相州
同十四日官兵圍厨川柵攻擊甚急城中矢石交
下且灌熱湯官兵多死之
同十六日出娼妓以歌舞于楼上官兵甚怒
同十七日賴義朝臣命諸卒壞屋填湟積乾草放
火城上西風時急餘炎及諸營貞任出城自奮斬
敵若干官兵以矛突而殪之力士六人昇屍而出時

任出于城外野戰
而死其屍解而何
出按出則入誤

三十四歲其子十世童子有三歲自當敵勇敢驚
人貞任弟重任家任藤原經清等為虜而所誅宗任
則任拜父為元皆降國中尽平均
世称鎌倉權五郎景政康平之役射左眼于鳥
海弥三郎非此役攻武衛于金沢柵之時也
按神社考曰景政社在相州鎌倉嘗從源義家
赴奥州之役矢中景政左眼不拔矢七日遂射
殺其寇今世患目疾者祈此社有效
人物史曰義家攻金沢城五年辛未其城已陷
此時藤原秀方鎌倉景政軍功拔群云
康平五年論可收于此

東史曰、文治五年九月二日、幕下賴朝出平泉而
赴厨川、此地乃暴祖賴義朝臣征戰之地、故巡視其
旧墟、
同四日、之志波郡、屯陣岡蜂社、
同十一日、自陣岡歸厨川、柵、
同十二日、工藤次郎行光、献盃酒、玩飯于厨川旅
館、
同十三日、犒于離散之士民、泰衡家臣由利八郎、
前日為宇佐美平二実政所獲、今日以勇敢免、
同十四日、檢奥羽省牒田文、前日燒失于兵燹、以
州人豊前介実俊、橘藤五實昌兄弟、能詳故実、召

而問之、殆如指掌、暗注進兩國、固籍而辨定郡縣、
券契、鄉里、田畠、山野、河海、委著見此、中注漏者才
三、所其、他無遺失、幕下大感賞、兄弟記憶博覽之
神妙、
同十五日、樋爪太郎等九人、降于厨川、見比爪
同十八日、秀衡弟四子本吉、冠者高衡降、
同二十二日、賴朝發厨川、移平泉、
按康平五年、城已陷、或戰死、或自尽、或就執者
凡七人、厨川次郎貞任、鳥海三郎宗任、黑沢尻
四郎正任、磐井五郎家任、比良六郎重任、比与
鳥比郎則任、白鳥八郎行任、共奥羽、押領使安

安倍八幡之子也。白鹿人將六部。其與神祇外也。

在荒城址。賴時所建也。蛇嶋。撫手松。勾當塚。同地。在城畔。

盛岡城 十一日

城主先出子新羅三郎義光曾孫遠光三男南部
光行二男小釜長清光行十二世守行應永之
役有戰功錄倉將軍持氏為陸奥司職其子義政
永享之役又能勤爾來二十四世高信亦從朝鮮
之役其子信直任從四位侍從累世守此城矣
方八町屯宮

在盛岡以南源賴義朝臣攻厨川之屯也

通法寺大悲閣

在二戸郡淨法寺以北來神河畔天喜中義家朝
臣所建其像以白銀所鑄土人謂之加美川悲閣

巖鷲山

在盛岡西高峻數十里山勢突兀彷彿駿州慈峰

其山麓已跨三郡左方隣投鞍峰右方按駒形岳

三峰相峙一曰焦炎嶽山頭常祭焦烟三月二日

夜大有焦焰六七日山木沙石二曰雙劍峰山勢

峻峻山如鋒劍三曰善述嶺山頭有善述閣

權現神祠

慈峰當改
作富士峰
按恐接誤

文化四年丁卯秋
肥後熊本藩訓導
白崎馬元章來信
中曰蝦夷ノ訓エハ
也馬成云蝦魚蝦
ノ蝦ニテ海老也蝦夷
人蝦多ク海老ニ似
タリ故ニ蝦夷ト云フ
一レ夷ノ字ヲソト訓
スルニ魚蝦ノソニテ
蝦ト云フトミナリ
蝦夷ハ西國人ヲ云フ
蝦夷ハ東國人ノ
云フ必シモ今ノ蝦夷
ノ人計ニテモ無トミ
ナリ日本武尊高士
山ヲ通リレ時蝦夷ト
モ火カケシテアリ又曰
蝦夷ハ日高見國ト
云フト古俗ニミエク
リ又曰藤武カ来リ

分大郡出縣自陸奥出津輕
三十八代齊明帝元年七月己巳朔己卯於難波
朝饗北越蝦夷九十九人東陸奥蝦夷九十五人
並設百濟調使十百五十人仍授柵養蝦夷九人
津州蝦夷六人冠各二階
同四年四月阿倍臣率船師一百八十艘伐蝦夷
鵯田淳代二郡蝦夷望怖乞降於是勒軍陣船於
鵯田浦鵯田蝦夷恩荷進而誓曰不為官軍故持
弓矢但奴等性食肉故持為官軍以儲弓矢鵯田
浦神知矣將清白心仕官朝矣仍授恩荷以小乙
上定停代津輕二郡郡領遂於有間濱石聚渡嶋

事出羽ノ海邊ニ
アリト云フ人アリ
忠保曰獲武社津
輕ニテリト津輕浪
士松田某ノ物語ニ
テ聞レリ又按熊
襲蝦夷ノ稱ハ賜
谷味谷ノ人ノ通稱
ニシテ不帰順其政
本地ノ人ヲシテ
言ハナルシ

蝦夷等大饗而歸
五年伊吉連博德書曰小錦下坂合部石布連大
山下津守吉祥等二船奉使吳唐唐路九月十三
日行立百濟南畔之嶋經數日二十九日馳到東
京天子問曰蝦夷國在何方使人謹答國在東北
又問曰蝦夷幾種使人謹答有三種遠者名都加
留次者兼蝦夷近者名熟蝦夷
十四代元正帝養老四年正月丙子遣渡嶋津
輕津司從七位諸若鞍男等六人於靺鞨國觀其
風俗靺鞨北狄別種
五十七代陽成帝元慶二年七月官使保則伐蝦

忠臣曰云塵之州
去盡字可去

夷於出羽稍得利然殘党多據津輕等指之
八十二代後鳥羽帝文治六年正月六日大河次
郎兼任超千福山本而到津輕戰宗佐義平次景
政大見平二家秀右圓三郎友景雜色澤安等
塵之

八十八代後深草帝寶治三年十一月十二日陸
奥留主告錄倉曰去九月十日巨魚流死于陸奥
國津輕海濱其狀如人相傳古來見此者不超于
三年必有凶賴嗣不悅

又本鳴
別於... 津輕屬和州可疑骨
題不知 同 人志以

日夷
右陸奥國郡縣前篇所舉伊達信夫安達安積
磐瀨會津白河石川磐城菊多標葉合十有一

日夷
志波富田耶摩糟部肥内和戎稗絶磐手津輕

合十有七郡
志波富田耶摩糟部肥内和戎稗絶磐手津輕
合十有七郡
志波富田耶摩糟部肥内和戎稗絶磐手津輕
合十有七郡

邑二十有一郡則為四十有九郡焉外有阿曾
治大名門金原郡裁大沼鹿角洲伊高野稻我
行波十一郡統之五十四數則猶餘六郡何失
多哉想夫後世屢有沿革而或改郡名或沒村
落者亦多是以有齟齬參差之疑耳此已下有
名雖而不詳郡縣土地者雜輯而舉之以談方
隅之正地理之詳于明者之說焉其六各類聚
而叙之以鄉關山峰岡谷原野川澤江浦瀉磯
槁坂池沼瀨塚牧地備後人之觀覽焉
狹布里 已下郡縣不詳仍雜輯之

哥枕古傳云郡名也而當國無此郡名如何衣笠

内府歌郡也或云只是布谷也云或說曰今此
村落在南部境内
哥林良裁ふきの細布奥州より出せし布二きよき狹の
字法多也せりしむる多し云云河をりてりおほせん
布といふ又細布といふきよき布の名より流傳る
奥備前より出せし布をりし狗布といふきよき布をりし狹
布といふ云云是らぬやうて狗布といふきよき布をりし
まゝに云ふ細布をりし布をりし布の物を細布といふ
はり多しぬ物も細布をりし布をりし布をりし布をりし
細布をりし布をりし布をりし布をりし布をりし布をりし
細布をりし布をりし布をりし布をりし布をりし布をりし

志つのがう志つる布のぬきたる川糸の毛の布の種めせ
けあも定説知くく向ひてをいふ人をも只人のよき
ふもよき又ふの細布といふはけみりふの種より出るる
と奥備切ふ作り是古き義心世奥の郡たの内ふふ
とふ部かふふのすまをふふ部ふあるたせせいふを
こもる部海し志つふしらすのこを信ふた部はふふ
ゆり

後拾遺(志一)

又中集布部六帖かき人志ん

能因法師

錦本をまかりくたを朽ふまきりふの細布む種あをいふ

新拾遺(志二)

伏見院法親

よとふふ約あひくた家志のきとあも志のぬきふの細布

六帖

新集(志一)

新集(志一)のりふの細布を七きむ種あひくた志のぬきふ

堀河院百巻

仲實館

中集

中集(志一)のりふの細布を七きむ種あひくた志のぬきふ

六帖

かほくふくた志のぬきふの種あひくた志のぬきふ

志のぬき

中集

中集(志一)のりふの細布を七きむ種あひくた志のぬきふ

堀河院百巻

糸のぬきふの細布を七きむ種あひくた志のぬきふ

六帖

中集(志一)

五月布

ねぶすめの

おきりりふのせき布をき衣うへにあはれははのうき

口の部

陸奥

衣の部内太極

この布のきふの部は布のせきに人のうらなりきり

口の部

文治六年五月廿一日

皇太后宮司藤原

錦本をちつた物りふちてきふの細布む移るあふへき

堀河ふき

匠房

きふの織をふきふのせきをたつ移るあはれ移るき

新撰ふき

信夏

きらぬきぬりふの細布む移るあはれ移るあはれ移る

憚関

人のむきせはたふき志志きして抱り人侍るをね安

ねぶすめの

きふの織をふきふのせきをたつ移るあはれ移るき

ねぶすめの

口の部

藤原宮司藤原

きふの織をふきふのせきをたつ移るあはれ移るき

文治二年十月廿一日

陸奥

按察使公直卿

きふの織をふきふのせきをたつ移るあはれ移るき

あはれ移るあはれ移るあはれ移るあはれ移るあはれ移る

かくちり惜むころをきくまの冥よは月夜は
衣手関

宝治二年不首系務

衣子冥陸奥

夫本笑

年内侍

手問関
きよふりふねふり人秋寄れんか
衣子冥陸奥

見色葉集未得証款

松山 附松浦

藤原

松山に雲り浦う多のせり
光来

瞿麥山 或曰常陸
松浦

金山
常陸子夫木集ふり
能因法師

哥枕曰古加福山又云加奈山又云安騎山六帖
加奈山云夫木集金山山城又陸奥

按是實金華山之事而延喜式黄金山者乃陸
奥山也

夫本山部
六帖
人九

口
かろく素かき福さきり常葉集十秋相聞
名玉捕祝

寄枕引萬葉集十秋相聞

金山古日下鳴鳥カ子マニノシタヒカシタニナクトリノスミニキハ十三カケル新スミ聞何ニ漢ニ

裏昏云萬葉歌秋雜歌也訓秋山者有其佳歌

私云金西方秋也隨俊賴朝臣詠云

此歌此萬葉為本歌歌但六帖加奈山云先達

歌枕皆如此仍守之又萬葉十卷秋雜部七夕

天漢水陰草金風靡見者時束之

真氣長戀心自白風妹音所聽紐解姓名

此歌与金字福有秋故属鳥

深津嶋山

寄物陳思

路後深津嶋山暫君目不見苦有

二方山

歌枕

えらけの二うやまの白やうけりふまをうり

無音山

紀伊又陸奥

まらるぬ風むのそめ人いつせ秋の香解の屋

いふ何ぞかふりふふ二見いふ南津たき命

山小松風の吹きまじりてきて笑てあはれなる

片岡山

御集

口 さらけのけし松山の極東平南より春風を

秋田山

家集秋田山

陸奥

好忠

みちねの秋田の山を秋雲のまじりて秋もあつた

衣帛山

三志六十字中

三志山 陸奥

よし

口 さらけの松山の極東平南より春風を

新象

冬より秋のやま秋をいへる

俊成

峯越山

藻瑠草 安達郡

冬より秋のやま秋をいへる

磯邊山

藻瑠草 口より春のやま秋をいへる

口 さらけの松山の極東平南より春風を

片井山

同美濃

或奥州

時多

記し

夏倉山

夏合日わろき

埒山

舟引山

逆柴山

昔山

細江山

右四區見萬金集而未得古歌

語

歌枕名寄為片戀

或云是語

六帖

藤垣子

肥後

さお

か

青森

片戀

宝治二年

左太

六帖

みち

櫻溪

市師

奇枕

曰古歌

上野云

一曰

兩國

之可

同奥州 四區見藻塩草而未得其奇

舟引山 逆柴山 昔山 細江山

右四區見萬金集而未得古歌

語

歌枕名寄為片戀

或云是語

六帖 藤垣子 肥後

さお かの

青森

片戀

宝治二年

左太

六帖

みち

櫻溪

市師

奇枕

曰古歌

上野云

一曰

兩國

之可

見萬金集

藤垣子

肥後

さお

かの

香追而可詳... 一曰也國... 古風...

藤垣草曰伊勢一志浦池類字

藤垣草

みちのけい... 志... 今志...

古名 志乃上野

か... 志...

河百首

忠房

志... 志...

新六帖

志... 志...

定園

志... 志...

源兼

志... 志...

安多思野

建保三年内... 志...

河...

家長朝臣

志... 志...

貞應三年...

為家...

志... 志...

志... 志...

志... 志...

廣野 魔野 兩區見 色葉集 未得古歌 下同
矢田廣野 漢塩草奥 刈蓋 色葉 所奉 廣野 同所歌
會瀬川

新 藤原 氏 今 志 四

藤原 氏 志 四

兼久内裏 哥合 阿 世 州 佳 矣

夫 本 川 於 藤 原 氏

大納言 雅定 白

せき ことめ ぬ 人 ぬ 流 小 せき 流 色 流 ぬ ぬ 流 川 水

重定

逢 瀬 川 袖 古 く せき 流 色 流 ぬ ぬ 流 川 水
檜 隈 川

石 葉 上

朝 臣 人 麻 呂 歌 集

左 檜 隈 檜 隈 河 尔 駐 馬 馬 尔 水 令 飲 吾 外 将 見

左 檜 隈 檜 隈 河 尔 駐 馬 馬 尔 水 令 飲 吾 外 将 見

ハ 吾 所 お ぶ さい の 高 大 和 範 兼 州 さ の け せき 流 色 流 ぬ ぬ 流 川 水

又 河 内 河 内 の け せき 流 色 流 ぬ ぬ 流 川 水

堀 河 玉 首

堀 河 玉 首

い ま よう せき 流 色 流 ぬ ぬ 流 川 水

百 番 哥 合

順 德 院 御 製

大木

すまの志をいふるよ川は雲の風をぬきくまの境をたえ

夏

臣邦國録

鳴子家こゑうらうき月夜をいひのよ川もつゆあま

口

文治三年

中納言家

いふをむいひのよ川もつゆあま

文治六年

口

俊成

けふみけいひ隈川は水もさうさるを

玉星川

大木

題

人志

陸奥の玉星川をよすくに海もあふ

夕葉川

羽別有夕葉山

口

仙洞

道

甲子の月をよすくに海もあふ

阿達野沢

見萬全集蓋溪安多思野

野田入江

見同各共不得歌

水江浦

松葉集作美津江浦

大木

家集

能因法

藻塩屋くあまふ今八住もさるえの浦もあま

口

奥州の志をいひのよ川もつゆあま

よよまの都の志をいひのよ川もつゆあま

摩伎浦

綾羅瀨

家集のやの瀨 陸奥 能因法師

夫木
あゝの瀨も紅も錦もささねやさるる穢き立回形系
此あゝの瀨も紅も錦もささねやさるる穢き立回形系
あゝの瀨も紅も錦もささねやさるる穢き立回形系
あゝの瀨も紅も錦もささねやさるる穢き立回形系

以詞考則此地有神社而過者必所以致秦
幣詠歌之敬之地也綾羅名亦可貴實好事
風流之神也然後人不知其神名亦可恨也
想夫能因身經東奥親見名跡之人此吟亦直
視面命之詞也幸在夫木篇中令後人傳有

忠保曰義和云以國
字祀之云々甚レキ僻
説也義和外集ノ勝跡
ニテケルヤ所經過ノ道途六
統ニ江戸ノ登リレノミニ其道
ヲ覺ユモ游觀ノ為ニラス
可謂從五馬ヲ否則使
後ノ更ニ投キ見聞ヲ以テ
廣キ名跡ヲ求ム答ヲ以テ臆
ヲ以テ斷ス我孤陋ヲ掩フ
為ニ答ルヲ説也可慨フ之
性々如此僻説ヲ以飾孤
陋愚者ハ可欺
モ吾心ヲ如何
不能追ヒノヤ

錦水塚

相傳在南部封境然其地不分明焉 忠保曰是亦是也

藻塚系本於錦水之是也 伯耆系本於錦水之是也

此佳境風致也尤可喜矣只恨本谷以國字
記之有下擇而不精語而不詳之弊故失其實
記而疎土地方偶者是乃和書之通患也戶
川地亦不記其州縣是亦遺恨也鳥乎石瀨
之潺湲楓葉之飄飆忽疊青綾于水上稍裁
紅錦于波底也千載之後讀此哥則猶宛然
臨於目前矣但考之喜式則信夫郡有白和
瀨神社蓋斯地乎 忠保曰非白和
瀨神社之地

むしり男流を本城を福中へ先遣に侍を侍
た本城に新をいひしりて志しりたりぬあて
しり男流を本城をいふも取入福をいふ本城
よしりし事なるもいふは福を思ひての事
ぬは本城錦本をいふは玉錦の事なりし
をとりて志しりし事なりし事なりし事なり
せし事なりし事なりし事なりし事なりし
よしりし事なりし事なりし事なりし事なり
又和歌抄之東ハ女をいふ事なりし事なり
女をいふ事なりし事なりし事なりし事なり
我婿小七人なりし事なりし事なりし事なり

きり付しりし事なりし事なりし事なりし事なり
云し事なりし事なりし事なりし事なりし事なり
又和歌抄之東ハ錦本ハ一説に東流東流男女をいふ
とていふ事なりし事なりし事なりし事なりし事なり
てその女の門小立きし事なりし事なりし事なりし事なり
てその事なりし事なりし事なりし事なりし事なり
ふりし事なりし事なりし事なりし事なりし事なり
云し事なりし事なりし事なりし事なりし事なり
錦本をいふ事なりし事なりし事なりし事なりし事なり
大和守の事なりし事なりし事なりし事なりし事なり
おしりし事なりし事なりし事なりし事なりし事なり

あ云

焼く子つ、朽婦、錦本、此程、了、を、海、小、た、い、き、る、が、
一、か、に、し、く、本、と、云、灰、の、本、の、物、の、色、小、合、四、一、小、き、水、と
灰、り、焼、え、す、せ、い、り、之、系、玉、の、紺、布、淡、色、の、之、り、め、で、記
い、ま、の、灰、の、本、を、こ、き、也、や、て、ま、の、灰、本、を、錦、本、と、し、こ、き
本、を、え、り、て、き、る、色、く、錦、本、淡、色、本、と、い、云、也、物、の、色、小、合
あ、ふ、い、ま、は、う、何、れ、一、日、志、り、に、き、る、く、あ、小、月、ね、く、同、小
ま、ま、立、人、女、い、く、と、り、か、日、婦、を、は、は、は、は、後、所、く、付
あ、小、付、く、云、灰、原、一、日、何、く、ま、あ、ま、た、を、色、り、て、こ
あ、ま、ま、立、人、女、い、く、と、り、か、日、婦、を、は、は、は、は、後、所、く、付

奥儀、抄、云、灰、の、本、を、錦、の、多、と、海、色、に、一、本、と、り、又
サ、新、と、を、と、い、は、色、こ、い、い、あ、本、と、ま、り、何、き、し、く、あ、本、を
い、る、と、り、人、さ、り、う、又、能、固、く、あ、り、
錦、本、を、ま、る、く、一、日、朽、か、り、ま、り、上、に、細、布、狗、あ、り、也
是、い、ま、は、う、い、く、本、を、い、い、し、く、新、云、何、方、少、も、只、錦、本、と、ま
之、中、也、あ、り、う、く、ま、ま、と、り、入、り、人、を、各、何、云、ま、り、は、玉、男
女、と、い、ま、り、人、と、何、れ、何、消、息、と、り、何、く、何、新、と、り、ま、り、あ
り、一、本、と、り、女、性、家、の、門、か、ま、り、ま、り、あ、り、人、と、男、人、男、の、ま、り
本、と、を、新、く、し、り、入、何、し、た、ま、り、何、本、を、い、く、ま、り、ひ
ま、り、い、ひ、ひ、り、え、ま、り、く、あ、り、あ、り、何、と、り、あ、り、男、の、ま、り、本
と、い、く、ま、り、う、い、く、福、を、あ、本、を、限、り、を、三、本、と、ま、り、也

その水は様子がいじやな馬の跡をの跡ぬは本と源本と
まの玉梅はさ不のやうな班の色をうをまきいひや
より知たかと多しやい令りせは美ふさもせぬや
源と云に法よくいふ系もや秋云時長いつまきこ也初
みの新とてうを日毎ふ一束をいひはふは班の色を
たきい源本とていふをうを少くは新一本といふ
たきい源一本といふをうを多しはあへうはたわつ
たきい源一本といひ源一本といふ実ふいさもせぬと源
ふと云ふつていふふやと云はあへうは又云
何うもふ元門ふまゝる西本といふは源と云ふは
わつてをいふは山つたいや一は源は知つたふは城にて

高らふ志るるつていふふをそのうさを志ある城りた
秋云古き文書は千束三年といふきと日毎の三年を
もいふ文を原といひは夜はたふは三年をいふ
ていふ束をいふもいふ人又は源本は交をいふ一本と
書ふもいふもいふいふやと云ふ也さうと云ふ同者
かたはういふをかきし束をいひは源の詞なるも
七回りのやまありや源一
かのいひはう女をいふぬは女子なるいひはあやせ
たのいひは源のいひはあやせ人をいひは源のいひは
やうをいひは源のいひはあやせ人をいひは源のいひは
後をいひは源のいひはあやせ人をいひは源のいひは

立野牧

家集秋田山 陸奥

好忠

夫木 立野の秋田山、秋野のまらけ、即ちつぎの奥牧

尾駸牧、荒野牧、東奥牧、花牧、共在南部領花牧乃城府而殊繁華地也

拾玉

慈然

在路のたけ牧、多きをてり、つぎのまらけ、

陸奥の牧のまらけ、つぎのまらけ、つぎのまらけ、素都濱 已下秋地

津輕以北、蝦夷地、土人謂之、外濱

家集、つぎのまらけ、陸奥、西行、法海

夫木集、つぎのまらけ、つぎのまらけ、つぎのまらけ

安瀉村

アヲモリ

在外濱青峰山畔、此地有鳥、産子于沙上、人捕其子、則悲鳴、殊甚、土人曰、沙鳥、或称善知鳥、或号鳥

夫木集

みらけ、つぎのまらけ、つぎのまらけ、つぎのまらけ

藻塩州

子、或号、つぎのまらけ、つぎのまらけ、つぎのまらけ

立野の大神言(初彼)なりて... 三角指と云抱小脩て... 表等と云るを... 久本... 母共小阿... 可流と云... ゆふこの... 常盤嶋

北海中有巨嶋迫蝦夷地其以北靺鞨國也冬候
嚴凝至寒甚堅氷滿海自暮春至中秋鴻雁在此

常盤嶋

嶋上世稱曰之常盤嶋

蝦夷

景行紀曰日本武尊曰朕聞其東夷也識性暴強
凌犯為宗村々無長邑々勿首各貪封塚並相盜
略亦山有邪神郊有女鬼遮衢塞徒多苦人其東
夷之中蝦夷是尤強焉男女交居父子無別冬則
宿穴夏則住櫟衣毛飲血昆身相疑登山如飛禽
行草如走獸承恩則忘見怨必報是以箭藏頭髻
刀佩衣中或聚党類而犯邊界或伺農桑以略人

民擊則隱草追則入山往古以來未泯王化
右見舍人親王日本書紀歷代征夷見別集
和哥木紀土小武篇曰高津宮仁德御宇命田
道臣擊蝦夷田道臣過嶮難夷賊等知其所統之
殺田道臣其從士玉梓者盜田道臣尸懷之縊死
兵夷賊憐之造墓納尸蝦夷首聞之大怒率眾來
破其墓俄大蛇出自墓中咆哮蝦夷首咋眾夷大殺
賊遂不咋造墓人弥出弓戰夷賊其象宛如軍陳
餘夷等恐蛇威悉平服異之謠
陸與者繩一筋之懸引于治兮兵止繩一筋于
又檀原宮御宇神武天皇東征時三軍疲勞天皇

詠歌競曲高謠進近軍遠軍將卒依曲得勇甚
競

楠立于稻狹之山之間從只如行守忌戰
斯者我早只飢已嶋津島鴉養等者哉今助于
來耶

先後之軍天皇之兄五瀬命中夷箭怒困於卑賤
及不克已冕天皇常懷此恨其憤无休時故其欲
進軍咸誅其夷賊詠歌兮勇眾卒

檀原宮天皇
充滿然來日之小子等之垣木于榮昌于茂葛
茂諸雖大莖一木其之子开妻乎繫而擊乎而然

止如兮大進一木其... 同下譬款第二太武曰檀原宮御宇天皇東征肯
依天神誨祭奉嘗嚴竈而與兵出張于天皇思惟
此役必得克即進兵而詠諷邊平

神風之五瀬之海之大石于八重南纏斯鳥小
擊而然止如其斯兮然限兮比于擊而然止如其
田道臣為夷賊被圍臨死自神助死為鬼擊朝敵
雪身辱即奇誼為神祝

田道臣

祝生也鳥吾壽者千代乎經而夷之膽乎嘗而
誼其忠保曰田道公誠忠大義金石之缺腸不消不磨為國死矣其露昭々
誅戮蝦夷光明万丈萬世之後日月爭光而詠祝神歎不能禁淚

女大將於朝

陸奥者、月夜集 十題不_レ居_レ下都 夫本集えいひの里陸奥

後京極

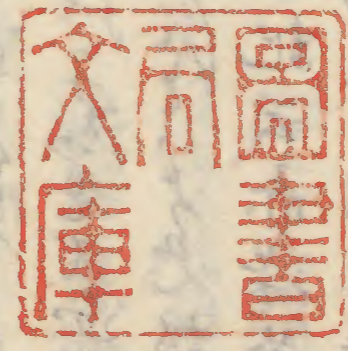
家集志身中

夫本集 行以海也元をいほ名の煙たふおとちり名をあらん

藤原家七 ことわをもりもせ人よけのえをふにえち秋の初月

同袖中抄才十毒氣の矢

湖才や子鳩のえんつらる毒氣の矢と毒は此
影昭云毒氣の矢と、たぐのえん毒の相の合ふ附子
云毒と好りて甲のあき方地をりそりて了附子矢
と、りき是に、下与藤塔並同見于矣。



奥羽観迹闻老志卷之十二終

